

漢文墓誌より描く六世紀華北分裂期のソグド人

山下将司

はじめに

北朝期の中国におけるソグド人の活動としてよく知られるのは、「酒泉胡」と呼ばれた安諾槃陁が西魏の使者として突厥に派遣された事例であろう。『周書』突厥伝に見えるこの一件は、突厥と中国との絹馬交易の開始、ひいては、それに基づく突厥建国の幕開きを告げる記念碑的出来事として注目されてきた。^①

しかしながら、隋唐の母体たる西魏・北周においては、正史を繙いてもソグド人の活動はこの一条しか見出すことができず、宮廷にはびこる「恩倖」と化したソグド人の姿を『北齊書』が伝えるのとは対照的に、西側のソグド人の活動は長らく不明なままであった。

ところが、一九八〇年代から九〇年代にかけて、寧夏回族自治区固原で史氏墓群が発掘され、さらに二十世紀末から今世紀初頭に太原や西安で北朝期ソグド人墓が相次いで発見されると、それに伴って多くの漢文

墓誌が出土した。

これによって史料状況は一変し、墓誌から得られた情報に基づき、編纂史料からソグド人が再発見されるという事態にまで至った。表一はソグド人墓誌の出土状況を示し、表二は墓誌が出土したソグド人と歴史的事件との関わりを生年に照らして一覧に

表1 20世紀～今世紀間 新出ソグド人(西魏・北周系)墓誌

墓主	生没年	墓誌刻年	出土年	出土地
史道德	613-678	678	1982	固原
史索巖	579-656	658	1985	固原
安娘	590-661	664	1985	固原
史訶耽	584-669	670	1986	固原
史鉄棒	623-666	670	1986	固原
史射勿	544-609	610	1987	固原
史道洛	591-655	658	1995	固原
虞弘	534-592	592	1999	太原
安伽	518-579	579	2000	西安
史君	494-579	580	2003	西安
康業	512-571	571	2004	西安
安元寿	607-683	684	1972	礼泉
曹怡	581-655	655	2007	汾陽
康子相	592-657	657	※2010	洛陽
翟曹明	?-579?	579	※2011	靖辺
翟天德	557-634	634	※2015	西安

本人ないし祖先の事績が西魏～唐初にかかる墓誌に限定。網掛けは石見2016に載録。※は墓誌公刊年を示す。

表2 北朝時代生誕ソグド人（西魏・北周）と歴代事件

	生没年	北魏分裂	北周成立	北齊滅亡	隋建国	隋再統一	煬帝即位	唐建国	玄武門変
		535	557	577	581	589	604	618	626
翟曹明	? -579	40代?	70代?	90代?	没				
史君業	494-579	42	54	74	没				
安伽	512-571	24	46	没					
虞弘	518-579	18	40	60	没				
史射勿	534-592	2	24	44	48	56	没		
史射勿	544-609		14	34	38	46	61	没	
翟天德	557-634		1	21	25	33	48	52	60
史索巖	579-656				3	11	26	40	48
曹怡	581-655				1	9	24	38	46
史訶耽	584-669					5	20	34	42
史道洛	591-655						11	25	33
康子相	592-657						12	26	34
安元寿	607-683							11	19

人名ゴチックは武官としての事績があることを、また、年齢の斜体はその事件への関与を示す。

したものである。

このような状況の中、出土した墓誌の読解が集中的に行われ、その集大成として二〇一六年に石見清裕を編者とする『ソグド人墓誌研究』が刊行され、筆者も執筆の一部を担当した（石見二〇一六）。当書は、北朝・唐初間のソグド人墓誌十一人とソグド語墓誌一点に対する訳注を載録したもので、西魏・北周・隋・唐という長安政権下に在ったソグド人の全体像解明を試みている。当書をはじめとする一連の墓誌読解の成果として挙げられるのが、商人でもなく「ソグド系突厥」（突厥の勢力圏に移住して騎馬遊牧民化したソグド人^③）でもない「第三のソグド人」、すなわち軍

人としてのソグド人を浮かび上がらせたことである。この「第三のソグド人」について、石見は次のように定義した。「唐建国よりも前に華北に移住し、長安など都市部では外来人コミュニティを、地方では各地にコロニーを形成。不安定な政局のために自らの郷兵組織をもち、それが国家軍の中に位置づけられ、遂には唐の建国にまで関わったソグド人」である、と^④。この新たなソグド人像の発見により、唐の成立とは、五胡諸族だけでなく、ソグドをも巻き込んだ民族のうねりの中から生じた現象と見るべきことが提示されたのである。

しかし、右の「第三のソグド人」の概念には問題点も指摘しうる。かつて谷川道雄が論じたように、北朝時代後期には各地に漢人の郷兵集団が澎湃として現れ、やがて西魏・北周の中央軍へと編成されていった^⑤。また、近年、平田陽一郎は、西魏・北周による郷兵集団の結集があらゆる種族を対象としていたと指摘した^⑥。つまり、これらに基づけば、ソグド人は戦力としてあまりに少数であり、漢人やその他の郷兵集団の中に埋没するしかない存在であったとも言える。しかし一方で、隋末唐初期における武威安氏の活躍など、彼らが集団の規模からは推し量りたい事績を残したことも周知であらう^⑦。このことから、はたして彼ら長安政権下のソグド人の特質を軍人と限定し、その他の要素、例えば、商人との二面性や流動性について考慮する必要はないのか、という疑問が浮上する。

そこで本稿では、ソグド人墓誌群に見える二つの特徴的な傾向、すなわち、①唐の初期における家業への回帰と、②西魏・北周期に見える「薩保の別地就任」を手がかりに、この問題について考察したい。

なお、編纂史料の引用には訓読を、墓誌史料の引用には和訳を併せて提示する。

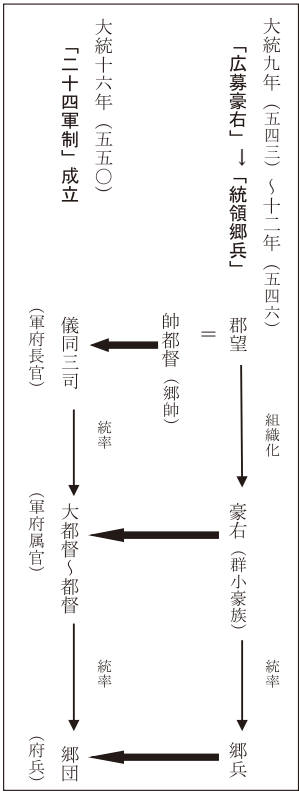
一、軍人としてのソグド人

(一) 西魏二十四軍制とソグド人

はじめに墓誌読解の成果として浮上した「第三のソグド人」すなわち軍人としてのソグド人について概観する。彼らの多くは西魏で施行された二十四軍制の軍府官として現れるので、ごく簡単に二十四軍制の成り立ちについて見ておくことにする。

西魏は建国当初より東魏に対して軍事的劣勢にあったが、大統九年（五四三）に起こった邙山の戦いでの敗北を機に、関隴地方の土着勢力を軍勢力として取りこむ施策を開始した。谷川道雄によれば、それには「広募豪右」と「統領郷兵」という二つの段階があった。まず大統九年に始まる「広募豪右」では、各地の県レベルの土豪層に働きかけて郷兵すなわち郷里の人から成る軍団を結成させ、次に大統十二年（五四六）頃より現れる「統領郷兵」では、郡望つまり郡レベルの名望家たちを「郷帥」として各地に配置し、土豪層が結集した郷兵の組織化を進めさせた。こうして各地で結集された郷兵は、大統十六年（五五〇）までに地方軍府（儀同府）へと編成され、軍府の長官には郡望が、軍府の属官には土豪層たちが任じられ、郷兵は軍府軍団として西魏の中央軍に組み込まれていったのである（表三）^⑧。この軍事体制が北周や隋の文帝期、あるいは唐初に継承されていく。表四に示すように、ソグド人の漢文墓誌にはこの二十四軍制の軍府長官や軍府官に就任した者が多く見られ、中にはソグド人を軍団兵として率いたことが明らかな事例も見出される。

表三 西魏二十四軍制の成り立ち



表四 墓誌に見える主なソグド人の軍府官就任事例（ゴチックは軍府長官職）

姓名	軍府官	他の官職	郷兵統率の有無	出典
① 翟曹明	儀同（西魏？北周？）	夏州天主	可能性あり	〔翟曹明墓誌〕
② 安伽	大都督（北周）	同州薩保	可能性在り	〔安伽墓誌〕
③ 史射勿	都督（北周）		可能性あり	〔史射勿墓誌〕
④ 史索巖	帥都督・大都督・驃騎將軍（隋）		可能性あり	〔史索巖墓誌〕
⑤ 史大興	鷹揚郎將（隋）・驃騎將軍（唐初）		可能性あり	〔史大興墓誌〕
⑥ 虞弘	儀同・領并介代三州郷団（北周）	檢校薩保府	可能性あり	〔虞弘墓誌〕
⑦ 安修仁	大都督（隋）			〔安修仁墓碑〕
⑧ 曹遵	薩保府車騎將軍（唐初）		ソグド郷兵を統率	〔曹怡墓誌〕

いくつか例を挙げると、①翟曹明は、これらの事例の中で最も生年が早いと見られる人物で（表二参照）、その墓誌には西魏軍に従軍して東魏と戦ったことが見える。^⑨

大周大成元年歲次己亥三月癸巳朔四月乙未夏州天主儀同翟君墓誌
君諱曹明、西國人也。祖宗忠烈、令譽家邦。受命來朝、遂居恒夏。
君幼懷岐嶷、長有才雄。罽罽當官、恂恂郷邑。傷魏戡之哀泯、慨臣
下之僭凌、是以慕義從軍、誅除亂逆。巨猾摧峰、六軍振振。守賞既

降、威聲漸著。

大周の大成元年（五七九）、歲次己亥三月癸巳朔、四月乙未、夏州
天主・儀同翟君の墓誌。

君は諱を曹明といい、西国の人である。代々の祖先は忠義に厚く、
国中で誉め称えられた。天子の命を受けて入朝し、そのまま恒夏の
地に住んだ。君は幼くして秀で、長じて優れた才能を発揮した。官
職に就いては直言を憚らず、郷里にあつては慎み深く振る舞った。
魏の衰え滅び行く様に心を痛め、臣下（＝高歡）が驕つて君主を蔑
ろにしていることに憤り、ここに正義を慕つて従軍し、反逆者ども
を誅殺した。大悪人は矛先をくじかれ、天子の軍は大いに振るつた。
天子が褒美を用意し与えると、威聲は次第に高くなつた。

冒頭の誌題の儀同は西魏・北周期の軍府長官職に該当する。^⑩また、彼の
肩書きには夏州天主というのもあり、天主はソグド聚落内に設けられた
官職の一つで、ゾロアスター教神殿の管理を担つたと考えられている。^⑪
つまり、翟曹明はソグド人聚落の指導層であると同時に軍府の長官にも
就いており、ソグド人を兵士として率いたとも考えられるのである。し
かし、儀同をはじめとする軍府官の多くは、単に位階を示すだけの散官
の場合もあり、この事例も間違いなくソグド軍団を率いたとは即断でき
ない。

一方、ソグド人指導者がソグド軍団を率いたことが明白な事例として
は、⑥虞弘が挙げられる。「虞弘墓誌」には次のようにある。^⑫

武平既鹿喪綱頽、建德遂蚕食關左。収珠棄蟬、更悛琴瑟。乃授使持
節、儀同大將軍、廣興縣開國伯、邑六百戶。體飾金章、銜轡簪笏。
詔充可比大使、兼領鄉團。大象末、左丞相府、遷領并代介三州鄉團、
檢校薩保府。

北斉の後主が皇帝の資格を失い綱紀が頽廢すると、北周の武帝はそ
れに乗じて関東の地に攻め入つた。武帝は優れた者を登用し無能な
者を排除したので、公（虞弘）は北周の人々と関係を深めることと
なつた。使持節・儀同大將軍を授けられ、広興県開國伯に封じられ、
食邑六百戸を与えられた。こうして公は身を金章で飾り、北周に仕
えることとなつた。「大使に相当させるべきであり、郷団を統領せよ」
との詔を受け、大象年間（五七九―八一）の末期には左丞相府によ
り転任して并州・介州・代州の三州の郷団を統率し、その薩保府を
治めた。

虞弘は軍府長官職の儀同を帯びるとともに、三つの州の郷団の統率を命
じられたとある。ソグド人の虞弘にわざわざ三州にもわたる漢人郷兵軍
団の統率を命じたとは考えにくく、また、彼はソグド人聚落を統轄する
官署である薩保府も治めたことから、彼が率いた郷団はソグド人
聚落から編成されたものであると判断できる。

他にも、涼州（武威）に拠点を置く有力ソグド人一族、武威安氏の⑦
安修仁が、隋代に大都督という軍府官に任じられ、郷兵の統率を命じら
れたことが彼の墓碑の逸文に見える。涼州には大規模なソグド人聚落が
存在しており、これもソグド人指導者がソグド人から成る軍団を統率し
た事例だと考えられる。^⑬さらに、介州（現山西省汾陽）に住んでいた⑧
曹遵というソグド人が、唐初に薩保府の車騎將軍に任じられている。車
騎將軍は当時の軍府長官職に該当することから、この事例は薩保府の中
に軍府が設けられていたことを意味し、そこに属する軍兵はソグド人で
あつたと判断できるのである。^⑭

(二) 唐建国への関与

さて、単に二十四軍制の地方軍府や軍団を構成したソグド人が存在したというだけであるなら、それは特筆には値しない。なぜなら二十四軍制は鮮卑や羌・氐など広く非漢人をも組み込んでおり、ソグド人だけの特殊事例ではないからである。^⑮ 重要なのは、軍府官に任じられたソグド人や軍団化を経験したソグド集団が、唐の建国にまで関与し、その支配確立に貢献したとも言いうる事績を残した点にこそある。その代表的な事例が固原の史氏と武威の安氏である。

固原史氏は、北朝時代から唐代にかけて原州（現寧夏回族自治区固原）を拠点としたソグド集団で、薩保を輩出した家系に属する^③史射勿という人物が、北周から隋にかけて軍府官および軍府長官を歴任し、数々の征討に従軍した。また、固原には史射勿とは別の家系の史氏一族も住んでおり、この一族は史射勿の家系より家格が劣ると見られている。その一員の^④史索巖も隋の煬帝期から唐代にかけて軍府長官を歴任している。隋末の乱では、固原史氏は史索巖の指揮の下に唐に敵対した軍閥・薛举と戦い、建国間もない唐朝を支援したのである。^⑮

一方、武威安氏では、安修仁が隋末に李軌という人物を擁立して涼州に軍閥政権を樹立するが、やがて兄の安興貴とともに唐朝と結び、李軌政権を転覆させて、河西一帯を唐朝に献上するという挙に出る。注目すべきは、李軌の擁立とその転覆に際し、安修仁が「胡人」すなわちソグド人の集団を率いていることであり、この集団こそは彼が隋代に大都督として組織したソグド人軍団に由来すると考えられる。^⑮

他にも、先述した^⑧曹遵の息子、曹怡が李淵の太原挙兵に従軍しており、これは介州のソグド軍団が李淵に帰属したことを意味しよう。注意しなければならないのは、介州は北周末に虞弘によって統率された郷団

が存在していた場所であるということで、曹遵・曹怡父子によって統率されたソグド軍団は北周末の郷団に由来すると見られるのである。^⑮

二、ソグド人軍府官と家業

以上、「第三のソグド人」について概観した。次に、ソグド人墓誌群に見える二つの傾向から、これらのソグド人をはたして「商人ではない軍人としてのソグド人」^⑮と見なして良いのか、検討したい。

まず取り上げたいのは、家業回帰の傾向である。唐朝確立後、北朝から唐初にかけて軍府官等の武官を出してきたソグド人首領層の家系に、家業へ回帰するような動きが現れる。その代表的な事例は、先ほども取り上げた武威の安氏である。李軌政権を転覆させ、唐に帰属した武威安氏は、唐初最大の政変である玄武門の変にも関与した。安興貴の息子元寿が李世民陣営の一員として事件に直接関わり、李世民すなわち太宗の即位に貢献したのである。ところが、その三年後、息子に家業を監督させたいという安興貴の申し出により、元寿は官職を擲って武威に帰郷、十年余りの間、家業に従事したという。

以上について、「安元寿墓誌」に次のようにある。^⑳

皇基肇建、二凶構逆。公特蒙駢使、委以腹心、奉勅被甲於嘉猷門宿衛。既而内難克除、太宗踐極。爵祿攸設、先酬擢甲之勞、賞命所加、用荅披荆之勩。特拜公右千牛備身。（略）至三年、涼公以河右初賓、家業殷重、表請公歸貫檢校、有詔聽許。公優遊鄉曲十有餘年。

国家の基が建てられたばかりなのに、二人（＝李建成・元吉）の悪人が反逆を企んだ。公は特別に任務を授かり、腹心として信任され、勅命を奉じて武装し嘉猷門に宿衛した。こうして宮中の災いは取り

除かれ、太宗が位に即かれた。爵禄が用意され、まず武装して参陣した功績に報い、ついで褒美が与えられ、障害を除いた功績に応えた。特別に公を右千牛備身に任じた。(略) 貞観三年(六二九)になると、涼国公(Ⅱ安興貴)は河西の地が唐に帰属したばかりであり、また自分たちの家業も多忙であるとの理由から、上表して公を郷里に帰し監督させることを願ひ出て、詔により許可された。公は十年余りの間、郷里でのびのびと過ごした。

安興貴の玄孫に安史の乱の鎮圧で活躍した李抱玉という人物があり、その『旧唐書』の列伝に、「一族は代々河西に住み、名馬の飼育に長けていたので、時々の人々に称賛された」とあり、その家業とは軍馬の生産であったとわかる。⁽²¹⁾つまり、武威安氏は隋代に軍府官としてソグド人軍団を組織し、その戦力を背景として隋末の戦乱や唐初の宮廷内政変に関与して台頭する一方、拠点の武威において軍馬の生産を営み、その事業を堅持していたのである。⁽²²⁾

同様の動きは他のソグド人にも窺える。同じく前節で取り上げた固原史氏について見れば、史射勿には訶耽と道洛という息子がおり、二人は唐代において非常に対照的な事績を歩んでいる。訶耽は唐が建国されると、ただちに長安に赴いてこれに帰属し、玄武門の変でも安元寿と同じく李世民に加担したと見られる。その後、中書省の翻訳官に任じられ、中央に仕えていく。一方、弟の道洛は、左親衛という武官に就いたのみで官職を辞し、原州に帰還してしまう。以後、墓誌には、郷里で悠々自適、文字通り道楽三昧な余生を過ごしたとあるが、石見は、「史道洛は原州の史氏の家を管理するために帰郷した」と見ている。⁽²³⁾また、薛挙との戦いを指揮した史索巖は、中央には仕えず、貞観の初めまで軍府長官を務めた。

史訶耽・史道洛・史索巖の三者の事績を並べると、固原の史氏では一族内あるいは集団内で役割を分担していた可能性が浮上する。訶耽は唐朝中央とのパイプ役を担い、道洛は拠点である原州で自らの家業あるいは現地のソグド集団の監督に当たり、史索巖は軍府官として軍事を担ったのである。⁽²⁴⁾

他にも、洛陽で発見された「康子相墓誌」には次のように記される。⁽²⁵⁾

君諱子相、河南洛陽人也。其先出自康居、仕於後魏為頡利發。陪從孝文、粵自恒安入都渥洛、積德重胤、著於州閭。祖翻、以累葉魏臣、恥於齊霸。既遇周師入洛、擁衆先降、蒙授上儀同、左驍衛中郎將。(略)父清、隨左勳衛、晉王府屈咥真。以舊左右、加建節尉、守屯衛鷹揚郎將。(略)君生於誠孝之門、幼聞仁義之訓。(略)武德五年、直秦王府監司牧圉、勞力忘食、督察工徒、竭心無懈。太宗撫運、乃加優獎、以舊左右、蒙賜榮班。貞觀十年、勅授陪戎校尉。(略)年登讓秩、歸老舊廬。早則資舟、方在陶之潤屋、智而好殖、同賜也之駟駒。(略)以顯慶二年二月十八日、卒於洛州洛陽縣之嘉善坊、春秋六十六。粵以其年三月十有四日壬寅、窆於河南縣之平樂鄉。

君は諱を子相といい、河南洛陽の人である。祖先は康居の出身で、北魏に仕えてイルテベルに就いた。孝文帝が平城より洛陽へ都を遷すのにつき従い、徳を積んで代を累ね、郷里で名声を高めた。祖父翻は代々魏の臣下であったことから、北斉の覇権を恥じていた。やがて北周軍が洛陽に進攻すると、人々を率いて真っ先に降り、上儀同・左驍衛中郎將を授けられた。∴父清は隋で左勳衛、晉王府屈咥真に就いた。煬帝が即位すると、その侍臣であったことから、建節尉を加えられ、屯衛府に属する鷹揚郎將に就いた。∴君は誠実で孝行な家門に生まれ、幼くして仁義の教えを学んだ。∴武德五年

(六二二)、秦王府に宿直してその畜牧を管理すると、食事を忘れるほど職務に精励し、部下の監督にも、尽力して怠ることがなかった。太宗が即位すると、手厚い褒賞を受け、その侍臣であったことから、栄えある高位を与えられた。貞観十年(六三六)、詔によって陪從校尉を授けられた。…年老いて官職を辞し、老身を洛陽の旧宅へと帰した。干ばつに遭って舟を用意するさまは、陶の地で家を潤した

范蠡にも比べられ、賢い上に殖財を好むさまは、子貢(＝端木賜)が四頭立ての馬を駆って威容を示したのに等しい。…顯慶二年(六五七)二月十八日に洛州洛陽県の嘉善坊で亡くなった。享年六十六。その年の三月十四日壬寅の日に河南縣平樂郷に埋葬された。

北魏時代に洛陽に移り住んだ康氏一族は、康翻という人物が北周の洛陽進攻の際に「衆」を率いて降ったとあり、洛陽のソグド人集団を引き連れて北周に帰属したと考えられる。以後、子の康清が隋で晋王時代の煬帝の近侍官となり、孫の康子相が唐で李世民的秦王府に仕えるなど、宮中と密接な繋がりを築いていく。また、康清は鷹揚郎将という煬帝期の軍府長官にも任じられている。

ところが、墓誌は、康子相が晩年洛陽の旧宅に帰り、商業に従事したと述べる。墓誌文の傍線部に、春秋時代に越王勾踐に仕えた范蠡と、孔子の門人として有名な端木賜すなわち子貢の故事(『史記』貨殖列伝)が引用される。范蠡が勾踐の下を去った後、陶の地で商売を行い巨万の富を築いたというこの逸話は有名で、子貢が商才に長けた人物であったこともよく知られている。つまり、この二つの故事の引用は、官職を去った康子相が晩年、洛陽で商業に従事したことを示しているのである。老齡に達し官職を辞した康子相が俄に商業を始めたとも考えにくく、一族は長安に移住した後も、洛陽のソグド集団との連携を保持していたと見

るべきであろう。したがって、洛陽の康氏は北周に帰属した後、長安へ移住して中央と密接な関係を築いていたが、その一方で洛陽の旧宅を維持していたことがわかる。

最後に挙げる太原の龍氏は、西域のカラシヤールからの移住者で、ソグド人ではないが、龍潤という人物が唐初に并州の薩宝府長史に任じられ、また、その妻何氏はソグド人と考えられるなど、ソグド人と近い関係をもった一族と見られる。⁽²⁶⁾ この太原龍氏では、龍潤の子である龍義が李淵の太原拳兵に参加して長安占拠まで従軍し、その息子龍寿の墓誌では彼を「元從」と呼んでいる。⁽²⁷⁾ 第一節で述べたように、太原すなわち并州には、北周の時、虞弘に率いられて軍団化を経験したソグド集団が存在しており、龍義の従軍もこれと関係があると考えられる。

一方で、龍義の弟の龍敏や孫の龍叡の墓誌も出土しているが、彼らはいずれも官職に就かない処士として一生を終えている。しかし、その墓誌には、商業や利殖に長けた人物の故事がしばしば引用され、一族が巨万の富を築いていたことを物語っている。「龍敏墓誌」および「龍叡墓誌」には次のようにある。⁽²⁸⁾

家傳別業、觀金谷之初開、門接賓郊、逢玉厨之始闢。

一族は別荘を継承したが、その賑やかな様子は西晋の石崇が金谷に別荘を開いた當時を彷彿とさせ、一門は郊外に住んだが、その豪奢な暮らしよりは西晋の王濟が洛陽の北郊に家を移して美食に明け暮れた往事を目的にしたりするようだった(「龍敏墓誌」)。

大父世義、朝散郎。才兼卜張、富埒陶白、以雄豪自處。

祖父の世義は朝散郎であった。才能は卜式と張(該当者不明)を兼ね、富は范蠡や白圭に等しく、英雄豪傑を自認していた(「龍叡墓誌」)。

この太原龍氏も軍人として唐の建国を援助する一方で、それとは別に家業を保持していたと推測できる。

以上の事例から、たとえ軍府官等に就き軍人として行動したソグド人であっても、一族内あるいは集団内で役割を分担し、家業を保持していたと考えられ、経済活動から切り離された存在ではなかったことが浮かび上がる。つまり、これらの事例は、「家業への回帰」ではなく、「家業の保持」を示す事例と見るべきである。そしてこうした分担は、北朝時代から継続していたのではないだろうか。

三、西魏・北周におけるソグド人ネットワーク

それでは墓誌から西魏・北周時代のソグド人に経済活動の跡を見出すことはできないであろうか。この点に関して注目したいのが、墓誌群に見える傾向の二つ目、「薩宝の別地就任」である。

北朝期のソグド人墓誌には、墓主本人ないし祖先が薩保（薩宝）に就いた事例が多数見られる。薩保は北朝から隋にかけては中国領内のソグド聚落の統轄官であり、北朝期のソグド人聚落はこの薩保の下で一定の自治を得ていたとされる。⁽³⁰⁾したがって、薩保の就任事例が多く見られることは、従来の想定以上に多数で広範なソグド人の移住があったことを物語る。

ところが、墓誌には自らの居住地とは別の地の薩保に任じられた事例が複数見られる（表五）。これは、その聚落のリーダーが薩保に就くとは限らず、他の聚落に居住する者が任命される場合もあることを意味する。石見はこれを薩保運営上の重要な問題点として注意を喚起している。石見は、長安在住のd安伽が同州の薩保に任じられた事例を取り上げ、

遙領、つまり、ある聚落の薩保に任命されながら赴任せずに長安に止まり、聚落と朝廷との橋渡し役を務めたという可能性を指摘する。⁽³¹⁾こうした見方の他に、薩保が太守のように中央から一方的に派遣される官職と化していたとも考えられる。そうであれば、中国領内におけるソグド聚落の在り方や、ソグド集団と王朝権力との関係に対する見方を左右しかねない。しかし、この事例こそが、西魏・北周にもソグド人のネットワークが存在したことを示す証左だと考える。

表五 薩保の別地就任の事例

	a	b	c	d	e
姓名	安某	史思	史君	安伽	虞弘
時代	西魏	北周	北周	北周	北周
居住地	涼州	原州	長安	長安	太原
薩保就任地	長安	長安	涼州	同州	并介代三州
出典	「安修仁墓碑」	「史訶耽墓誌」	「史君墓誌」	「安伽墓誌」	「虞弘墓誌」

表五の事例のうち、a安某は涼州の居住者であり、c史君は涼州からの移住者、また、d安伽は本貫が涼州であり、史君と同じく涼州からの移住者である。つまり、この三人はいずれも涼州と関係あることが注目される。

まず、c史君の事例を詳しく見てみよう。史君はキッシン出身のソグド人で、漢文とソグド語文双方の墓誌が出土したことで注目を集めた。その墓誌に次のようにある。⁽³²⁾

《漢文墓誌》※原文の「…」は空格。

大周涼州薩保史君石堂

君諱……、史國人也。本居西域、土……。……及派、遷居長安。自他有耀、……。水運應期、中原顯美。(略)祖父史盤陀、爲本國薩保。(略)大統之初、鄉閭推挹、出身爲薩保判事曹主。……五年詔授涼州薩保。(略)大象元年五月七日、薨於家。年八十六。妻康氏、其歲六月七日薨。以其二年歲次庚子正月丁亥朔廿三日己酉合葬永□縣堺。禮也。

大周の涼州薩保、史君の石堂。

君は諱を……といい、史国の人である。その祖先は西域に居住し、その地は……であった。血統が分かれるに及んで、移住して長安に居住するようになった。光り輝く人物が遠方より到ったのであり、……であった。ちょうど北魏が天の運氣に應じていて、中原は光り輝いていた。(略)祖父の阿史盤陀は、この中国で薩保の地位に就いた。(略)史君は西魏の大統年間(五三五―五一)の初めに、郷里の人々より推挙され、身を起こして薩保府の判事曹主となった。

……(北周の保定?天和?建德?)五年には、詔によつて涼州薩保を授けられた。(略)北周の大象元年(五七九)五月七日、君は自宅で死去したのである。享年八十六であった。君の妻は康氏で、彼女もその歳の六月七日にこの世を去った。翌大象二年(五八〇)庚子の歳の正月丁亥朔の二十三日己酉の日に、永寧縣の境域の墓地に夫婦は合葬された。礼儀にかなったことである。

〈ソグド語墓誌和訳〉

かくして、キッシュ国の姓(「史姓」)で姑臧の在住(の者)がいた。彼は(中国の)天子……から姑臧の薩保「に任命された?」。彼はソグドの地では貴顕(?)でウシルカク(Wirkak)という名である。ソグド語墓誌からは史君が涼州(「姑臧」と関係が深いことが、また、

漢文墓誌からは史君一族が北魏時代に長安へ移住したと記されており、この一族は涼州を経由して長安へ移り住んだと考えられている⁽³⁾。史君は西魏の大統年間(五三五―五一)の初頭に、「郷里」すなわち涼州ソグド集団から涼州薩保府の属官と見られる「薩保府判事曹主」という官職に推挙された。このとき、史君が長安にいたのか、あるいは、たまたま涼州に移っていたのかは判然としないが、いずれにせよ重要なのは、「涼州のソグド集団」の推挙を受けたという点である。

西魏において、ソグド聚落内の官職の任命は、聚落指導層の推挙を踏まえて行われていたことが、「康業墓誌」の次の記述から看取できる。

君諱業、字元基、其先康居國王之苗裔也。父魏大天主羅州使君。去魏大統十年、車騎大將軍雍州呼業翟門、及西國胡豪望等、舉為大天主、祖世忠孝、積業義仁。年德敦厚、且恭且順。氷清玉潔、堪為軌範。諧合物情、稱允衆望。乃降詔許。

君は諱を業、字を元基という。其の先祖は康居の国王の末裔である。君の父は西魏の大天主で、羅州刺史であった。去る西魏の大統十年(五四四)に、車騎大將軍・雍州呼業であった翟門と、西国の胡人の有力者たちは君の父を推挙して大天主に就けようとし、次のように建言した。「この家系の先祖は代々忠と孝につとめ、歴代義と仁の氣風に富んでまいりました。長年の徳は非常に篤く、しかも慎み深く従順でした。氷のように清く玉のように潔く、世の模範となるにふさわしいでしょう。世間の実情にしつくり調和し、人々の期待に適合するとたたえられています。」そこで皇帝は詔を下してその申し出を許可した。

西魏の大統十年(五四四)に康業の父が大天主に任じられた際、まず車騎大將軍・雍州呼業の翟門と「西国胡豪望」すなわちソグド人有力者ら

が彼を推挙し、それを朝廷が承認するという手順を踏んでいる。第一節で触れたように、天主はソグド聚落内のゾロアスター教神殿を管理した職と見られる。また、翟姓はソグド姓の一つであり、翟門は朝廷内に官職を占めたソグド人指導者と考えられる。つまり、康業の父への大天主任命は、ソグド人指導層による推挙を経た上で執り行われたのである⁽³⁴⁾。涼州ソグド聚落が史君を薩保判事曹主に推挙したのも、これと同じ手続きが踏まれたと見るべきであろう。

史君は後年、北周の時に涼州の薩保にも任じられた。先述したように一族は長安に移り住んでおり、また死後、その墓が長安近郊に造営されていることから、史君は長安に居住していながら涼州の薩保に任命されたと見られる⁽³⁵⁾。

また、a 安某とは、本稿でたびたび取り上げている武威安氏の一人、安修仁の墓碑に記される彼の祖父を指す。安某については、史君の場合とは逆に、涼州に本拠地を置くソグド人が長安の薩保に就任した事例となる。以上のような史君と安某をめぐる状況から、涼州と長安の両都市間におけるソグド人の連携と、頻繁なソグド人の往来が浮かび上がるであろう。

次に、d 安伽の事例に注目する。「安伽墓誌」には次のようにある⁽³⁶⁾。

大周大都督同州薩保安君墓誌銘

君諱伽、字大伽、姑臧昌松人。(略)父突建、冠軍將軍、眉州刺史。(略)母杜氏、昌松縣君。(略)君誕之宿祉、蔚其早令。不同流俗、不雜囂塵。續宣朝野、見推里閭、遂除同州薩保。君政撫閑合、遠迓祇恩。德盛位隆、於義斯在。俄除大都督、董茲戎政、肅是軍容。(略)周大象元年五月、遘疾終於家。春秋六十二。其季歲次己亥十月己未朔、厝於長安之東。

北周の大都督・同州薩保安君の墓誌銘

君は諱を伽、字を大伽といい、姑臧昌松の人である。(略)父の突建は、冠軍將軍・眉州刺史であった。(略)母の杜氏は、松昌県君であった。(略)君はこのような幸運な宿命のもとに生まれ、若くして才能が豊かであった。世俗の人と行いをともにせず、俗塵の者と交わることがなかった。功績が朝野に知れわたり、見識が郷里で推賞された結果、同州薩保に任命された。君の政治は庶民を慈しみ、遠近の人々がその恩を受けた。徳は盛んで位は高く、道義を体現していた。間もなくして大都督に任命され、軍政を監督し、軍容を整えた。(略)北周の大象元年(五七九)五月に病に罹り家で亡くなった。享年六十二。その年、歳次己亥の十月己未朔の日、長安の東に埋葬された。

安伽は涼州武威を本貫とするソグド人であるが、長安の東方に位置する同州(現陝西省渭南市大荔県一帯)の薩保に任じられた。後に病に罹って家で亡くなると、長安の近郊に葬られていることから、長安に居を構えていたと見られる⁽³⁷⁾。つまり、彼は長安に居住していながら同州の薩保に任じられたのである。

吉田愛によれば、同州は長安と洛陽、あるいは、長安と東魏・北斉の軍事拠点である晋陽とを結ぶルート上に位置した要衝であり、西魏・北周における対東魏・北斉の最重要軍事拠点として、兵力・人口・武器・食糧・家畜等が集中する場所であった。つまり、同州は北魏の東西分裂という政治情勢の中で浮上した重要都市であり、このことが同地にソグド人が進出した背景であったと吉田は指摘する⁽³⁸⁾。

墓誌に、安伽は「功績が朝野に知れわたり、見識が郷里で推賞されて(績は朝野に宣べられ、見は里閭に推され)」同州の薩保に任じられたと

あり、その就任の背景には郷里における評価もあった。この郷里とは、当時彼が在住していた長安を指すのか、それとも、赴任先の同州を指すのか判然としない。しかし、同州という地の性格を踏まえれば、この地のソグド人は安伽同様に涼州から長安に進出し、さらには同州の重要性の高まりとともにそこへ移ったと見るべきであろう。したがって、長安であれ同州であれ、同じ涼州出身のソグド人として変わりはないのである。

最後に、b史思の事例を見ておこう。史思は、これも本稿でしばしば取り上げた固原史氏の一員である史訶耽の墓誌に、祖父として記される人物である。⁽³⁹⁾石見によれば、当時史氏が拠点を置いた原州は、涼州と長安を結ぶルート上に位置する交通の要衝であり、このことから史氏も河西を経て原州に進出したソグド人と見なすことができる。⁽⁴⁰⁾

以上の事例をまとめれば、「薩保の別地就任」とは、涼州に拠点を置くソグド集団の西魏・北周期における拡大、ならびに、涼州と進出先聚落間との緊密な連携を示すものと解釈できよう。つまり、各地のソグド人聚落は決して個別的・孤立的に存在していたのではないのである。

では、このような涼州ソグド集団による東方進出の目的とは何か。北周で同州薩保となった安伽は、大都督という官職も兼任している。これは位階を示す散官でもあるとともに、また、二十四軍制の軍府官でもある。実際、第一節で見たように、武威安氏の安修仁は、大都督の職をもつてソグド人から成る郷兵を統率している。この事例から類推して、安伽が同州で同地のソグド人郷兵を率いた可能性を指摘する見解もある。⁽⁴¹⁾

しかし、はたして安伽の任務はソグド人郷兵の統率に止まるものであろうか。また、同州ソグド集団の役割も、郷兵という単なる軍勢力でしかなかったであろうか。この点について参考となるのが、南朝梁の武

陵王紀（蕭紀）に仕えた何細胡というソグド人の事績である。

武陵王紀とは、梁の武帝の八男で、五三七年に都督益梁等十三州諸軍事・益州刺史に任じられて以来、十七年もの間、蜀を統治した。侯景の乱が起これと、その混乱に乗じて帝位を称し、江陵に拠った元帝と対決したが、敗北した。梁の王族ではあったが、実際には四川に拠った一種の割拠政権と見なしてよい。

この時代の四川の状況について詳細な考察を加えた前島佳孝は、武陵王紀が吐谷渾を介した西方との交易を独占し、その利益によって軍備の拡大を実現したと指摘する。⁽⁴²⁾この武陵王の下でその交易を管理したと見られるのが何細胡である。⁽⁴³⁾『南史』卷五三、梁武帝諸子、武陵王紀伝、一三三二頁および『隋書』卷七五、儒林・何妥伝、一七〇九頁には次のようにある。

在蜀十七年、南開寧州、越嶲、西通資陵、吐谷渾。内修耕桑鹽鐵之功、外通商賈遠方之利、故能殖其財用、器甲殷積。馬八千匹、上足者置之内廐、開寢殿以通之。

蜀に在ること十七年、南のかた寧州・越嶲を開き、西のかた資陵・吐谷渾に通ず。内に耕桑塩鉄の功を修め、外に商賈遠方の利を通じ、故に能く其の財用を殖やし、器甲は殷積す。馬八千匹、上足は之を内廐に置き、寢殿を開きて以て之に通ず。

何妥字栖鳳、西城人也。父細胡、通商入蜀、遂家郫縣、事梁武陵王紀、主知金帛、因致巨富、號爲西州大賈。

何妥、字は栖鳳、西城の人なり。父細胡、通商して蜀に入り、遂に郫県に家す。梁の武陵王紀に事え、金帛を主知し、因りて巨富を致し、号して西州大賈と爲す。

西魏・北周におけるソグド集団の長安や同州への進出も、この何細胡と同様の事例と見るべきではないだろうか。つまり、ソグド人は割拠政権下で交易を展開して軍費や軍需品の調達に当たるとともに、自らもその利益に与ったのである。先に見たようなソグド聚落間の連携は、ソグド人の軍人としての活動のみから生じたものとは考えにくく、ソグド人達の交易活動の軌跡を示すものと見るべきであろう。そして前節で見たように、軍人として活動したソグド人が、唐代に至るまで家業を保持することができたのも、このような聚落間を結ぶ交易網の存在があったからだと考えられるのである。

むすび

本稿で論じたことをまとめれば、以下のようになる。

北朝時代の長安政権下のソグド人の特質を、単なる軍人としてとらえるべきではなく、軍人として活動する一方で独自の交易網を展開し、その下で商業をはじめとする経済活動を維持したことにこそ求めるべきである。これによって、ソグド人は少数者として埋没することなく、唐初において特筆すべき業績を挙げるに至ったのである。

【注】

- (1) 『周書』卷五〇、異域伝下、突厥の条、九〇八頁、「其後曰土門、部落稍盛。始至塞上市繒絮、願通中國。大統十一年、太祖遣酒泉胡安諾槃陀使焉。其國皆相慶曰、今大國使至、我國將興也。十二年、土門遂遣使獻方物。」
- (2) 羅豐一九九六。
- (3) 森部二〇一〇、八一—一〇頁。
- (4) 石見二〇一六、三九二—三頁。当書の他、山下二〇〇五・

二〇一二・二〇一六bおよび蘇航二〇〇五も北朝・唐初間におけるソグド集団の軍団化について指摘する。

- (5) 谷川一九七一、一九九八。
- (6) 平田二〇一一、三五—四一頁。
- (7) 『旧唐書』卷五五、李軌伝、『新唐書』卷八六、李軌伝。
- (8) 谷川一九九八。
- (9) 『翟曹明墓誌』五七九年（北周・大成元年）刻。誌文は羅豐・榮新江二〇一六に載録。
- (10) 西魏・唐初間における軍府長官職の名称の変遷については山下二〇一二、四二頁参照。
- (11) 羅豐・榮新江二〇一六、二八三—八五頁、山下二〇一六、九五—一〇〇頁。
- (12) 『虞弘墓誌』五九二年（隋・開皇十二年）刻。誌文は石見二〇一六、一一七—三七頁に載録。
- (13) 天理図書館蔵『文館詞林』卷四五五殘卷所載「安修仁墓碑」、「隨開皇中、起家爲蜀王秀庫眞。遷都督檢校儀同兵。及秀廢、又爲大都督領本鄉兵。」山下二〇〇五参照。
- (14) 『曹怡墓誌』六五五年（唐・永徽六年）刻。誌文は山下二〇一二に載録。
- (15) 平田二〇一一、三五—四一頁。
- (16) 石見二〇一六、第Ⅱ部第二章「史訶耽夫妻墓誌」および第五章「史索巖墓誌」。
- (17) 山下二〇〇五、七三—六頁。
- (18) 山下二〇一二、四三—九頁。
- (19) 石見二〇一六、三九—四頁。
- (20) 六八四年（唐・光宅元年）刻、『氣賀澤目録』二四八〇。福島二〇一七参照。
- (21) 卷一三三、三六四五頁、「李抱玉、武德功臣安興貴之裔。代居河西、善養名馬、爲時所稱。」
- (22) 山下二〇〇八。
- (23) 石見二〇一六、二四三—四頁。
- (24) 石見二〇一六、第Ⅱ部第二章「史訶耽夫妻墓誌」、第三章「史道洛墓誌」および第五章「史索巖墓誌」。畢波は武威安氏と固原史氏に見えるこのような傾向を「独立性の保持」と解釈する。畢波二〇一一、七七—九頁。
- (25) 六五七年（唐・顯慶二年）刻、『氣賀澤目録』八五八。誌文は曹建強・

史料

- 馬旭銘二〇一〇に載録。
- (26) 「龍潤及妻何氏墓誌」六五五年(唐・永徽六年)刻、『氣賀澤目録』七二七。ソグド人と龍氏の関係については榮二〇〇一、また、龍潤から曾孫龍叙に至る一族と唐朝との関係については山下二〇一二、五〇―三頁を参照。
- (27) 「龍義及妻游氏墓誌」六六三年(唐・龍朔三年)刻、『氣賀澤目録』一二四二。「龍寿及妻粟氏墓誌」六九四年(唐・延載元年)刻、『氣賀澤目録』三〇一〇。
- (28) 「龍敏墓誌」六八一年(唐・開耀元年)刻、『氣賀澤目録』二三四一、「龍叙墓誌」七四一年(唐・開元二九年)刻、『氣賀澤目録』五八五五。
- (29) 荒川一九九八、一七一―七六頁。
- (30) 藤田一九三三、三〇〇頁、羽田一九七一、四二六―七頁、荒川一九九八、一七〇頁および一九九八、八八九頁。
- (31) 石見二〇一六、一八一―二五九―六〇頁。
- (32) とともに五八〇年(北周・大象二年)刻。漢文墓誌には多くの空格や欠損文字が含まれるが、石見二〇一六、第一部第二章「西安出土『史君墓誌』漢文部分」の復原案に拠る(三四―九頁)。また、ソグド語文の和訳は吉田豊二〇一六に拠る(七六頁)。
- (33) 石見二〇一六、四六一―五〇頁。
- (34) 山下二〇一六、一〇〇―一〇二頁。
- (35) 石見二〇一六、五八―六〇頁。
- (36) 五七九年(北周・大象元年)刻。誌文は石見二〇一六、第一部第一章「西安出土『安伽墓誌』」に載録。
- (37) 石見二〇一六、一八一―二二頁。
- (38) 吉田愛二〇一六。
- (39) 石見二〇一六、第二部第二章「史訶耽夫妻墓誌」。
- (40) 石見二〇一六、三八三―四頁。
- (41) 石見二〇一六、二一五頁、吉田愛二〇一六、三〇頁。
- (42) 前島二〇一三a、三〇一―三〇三頁および二〇一三b、三二四―二九頁。
- (43) 何細胡がソグド人と見られることは、桑原一九二六、三四〇―一頁および De la Vaisière 2004, pp.131-2. (影山和訳本二二―二頁)参照。

『梁書』『周書』『旧唐書』『新唐書』…中華書局標点本(北京)

参考文献一覧

『和文』

荒川正晴 一九九八「北朝隋・唐代における「薩寶」の性格をめぐって」『東洋史苑』五〇・五一、二六四―八六頁

一九九八「ソグド人の移住聚落と東方交易活動」『岩波講座世界歴史』一五、八一―一〇三頁

石見清裕 二〇一六「ソグド人墓誌研究」汲古書院

桑原隲藏 一九二六「隋唐時代に支那に来往した西域人に就いて」『内藤博士還暦祝賀支那学論叢』弘文堂、五六五―六六〇頁(桑原隲藏全集)第二卷、岩波書店、一九六八年に再録。

谷川道雄 一九七一「北朝後期の郷兵集団」『隋唐帝国形成史論』筑摩書房、二一九―五七頁(原載『東洋史研究』二〇―四、一九六二年、四二―四三頁)

一九九八「西魏二十四軍の成立と豪族社会」『増補隋唐帝国形成史論』筑摩書房、四三〇―五〇頁(原載『東洋史苑』四〇・四一、一九九三年、二四―四四頁)

羽田 明 一九七一「ソグド人の東方活動」『岩波講座世界歴史』六、四〇九―四四頁

平田陽一郎 二〇一〇「西魏・北周の二十四軍と「府兵制」」『東洋史研究』七〇―二、三二―六五頁

福島 恵 二〇一七「武威安氏「安元壽墓誌」」『東部ユーラシアのソグド人』汲古書院、一二七―六三頁(原載 森安孝夫編『ソグドからウイグルへ』汲古書院、二〇一一年、一四―一七四頁)

藤田 豊八 一九三三「薩寶につきて」『東西交渉史の研究 西域篇及附篇』岡書院、一九三三年、二七九―三〇七頁(原載『史学雑誌』三六―三、一九二五年、四一―六一頁)

前島 佳孝 二〇一三a「西魏の四川進攻と梁の帝位闘争」『西魏・北周政権史の研究』汲古書院、二八五―三一頁(原載『中央大学大学院研究年報』二九(文学)、二〇〇〇年、八九

一〇三頁

- 二〇二三 b 「西魏・北周の四川支配の確立とその経営」『西魏・北周政權史の研究』三三三―三五五頁（原載『中央大学人文研紀要』六五、二〇〇九年、三一―六五頁）
- 森部 豊 二〇一〇「ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的發展」関西大学出版部
- 山下 将司 二〇〇五「隋・唐初の河西ソグド人軍団―天理図書館蔵『文館詞林』「安修仁墓碑銘」残巻をめぐる―」『東方学』一一〇、六五―七八頁

二〇〇八「唐の監牧制と中国在住ソグド人の牧馬」『東洋史研究』六六―四、一一―三一頁

二〇一二「唐の太原拳兵と山西ソグド軍府―「唐・曹怡墓誌」を手がかりに―」『東洋学報』九三―四、三一―五九頁

二〇一六 a 「西安出土「康業墓誌」」石見二〇一六載録、八一―一三頁

二〇一六 b 「軍府と家業―北朝末至唐初的粟特人軍府官和軍団」榮新江・羅豊編『粟特人在中国―考古發現与出土文献的新印証』科学出版社（北京）、五五八―七一頁

吉田 愛 二〇一六「同州と西魏・北周の覇府」石見二〇一六載録、二五―三〇頁

吉田 豊 二〇一六「西安出土北周「史君墓誌」ソグド語部分訳注」石見二〇一六載録、八〇―六一頁（頁逆順）

※『氣賀澤目録』…氣賀澤保規編『新編 唐代墓誌所在総合目録』明治大学東アジア石文物研究所、二〇一七年

〈中文〉

畢 波 二〇一一「中古中国的粟特胡人―以長安為中心」中国人民大学出版社（北京）

羅 豊 一九九六『固原南郊隋唐墓地』文物出版社（北京）

羅豊・榮新江 二〇一六「北朝西国胡人翟曹明墓誌及墓葬遺物」榮新江・羅豊編『粟特人在中国―考古發現与出土文献的新印証』二六九―九九頁（北京）

榮新江 二〇〇一「隋及唐初并州的薩保府与粟特聚落」『中古中国与外来文明』生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇一年、一六九―七九頁（北

京）（原載『文物』二〇〇一―四、八四―九頁（北京））

蘇 航 二〇〇五「北朝末期至隋末唐初粟特聚落鄉團武裝論述」『文史』二〇〇五―四、一七三―八六頁（北京）

曹建強・馬旭銘 二〇一〇「唐康子相墓出土的陶俑与墓誌」『中原文物』二〇一〇―六、一〇七―九頁（鄭州）

〈仏文〉

De la Vaisière, E.

2004 *Histoire des marchands sogdiens*, Bibliothèque de l'Institut des Hautes Etudes Chinoises, 32. Deuxième édition révisée et augmentée, Paris. (影山悦子訳『ソグド商人の歴史』岩波書店、二〇一九年)

〔附記〕

本稿は、二〇一九年五月一八日に東京で開催された第六四回国際東洋学者会議のシンポジウム「ソグド人研究の新展開―北朝期の中国とソグディアナのソグド人の実像」における報告「戦乱の中のソグド人―漢文墓誌より描く六世紀華北分裂期のソグド人」に基づく。